

**校名：静岡大学教育学部附属静岡中学校**

所在地：〒420-0856 静岡県静岡市葵区駿府町1-86 電話番号：054-255-0137

記載日：平成28年4月24日 記載者：服部 重磨 記載者役職：副校長

**貴校の校風、おおまかな特色について：**

本校の一番の特色は、学業を伸ばすことと共に「自由」な校風の元に、生徒たちが伸びやかな中学生生活をすごしていることにある。例をあげれば、制服も自由であり、通学時間による制限以外は学区もない。このような表面上の自由の底流には、校訓の「真、善、美」の姿を追い求める中に「自主独立」の精神を培うという少々難解な校訓が存在している。例えば学校の立地条件の良さを十分に活用して、自然、歴史、行政などの生きた教材を取り込むことで、教科書題材を応用・拡張した、生徒たちが主体的に能力を開花できるような授業や活動を行っている。また保護者や多くの卒業生の協力を得て、「本栖湖キャンプ」や「附中夢講座」など、本校ならではの「生きた教育」を展開してきている。

こうした多面的な活動を通して、生徒たちが自主性を重んじつつ進むべき方向を模索して、徐々に独立精神を身につけていくように教職員が導いている。

**貴校の卒業生の活躍状況について：**

本校は来年度で創立70周年を迎え、多くの優秀な卒業生を世に送り出してきている。卒業生の多くは地元の静岡県、静岡市はもちろんのこと、全国、全世界に活躍の場を広げている。卒業生の活躍状況を学校として追跡調査はしていないが、同窓会組織がしっかりとしており、10年毎の節目に周年行事を行うと共に、第一期生から直近の卒業生までを網羅した同窓会名簿を作成しており、各世代の同窓会幹事が同窓生一人一人の近況を把握し、情報の集約を行っている。

**貴校勤務経験者の先生方が公立学校・教育委員会などへ戻られた後の活躍状況について：**

本校の勤務経験者の多くが、本務地である市町の学校や県、市町の教育委員会で中心的な役割を果たしている。特に追跡調査をしてはいないが、OB会組織があり、年に一度講演会を開催し、現職との交流、情報交換を行っている。また、研究発表会では必ずOBへの通知をするため、教頭を中心としてOBの勤務や活動の状況を把握している。

魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて：

・「次期学習指導要領に生きる教育実践」

平成 20～25 年に行った「人間形成のための学力」に関する研究は、国立教育政策研究所が公開している平成 26 年度プロジェクト研究調査研究報告書『資質・能力を育成する教育課程の在り方に関する研究報告書 1 ～使って育てて 21 世紀を生き抜くための資質・能力～』の中で言及されており、次期学習指導要領と強く関連した研究である。

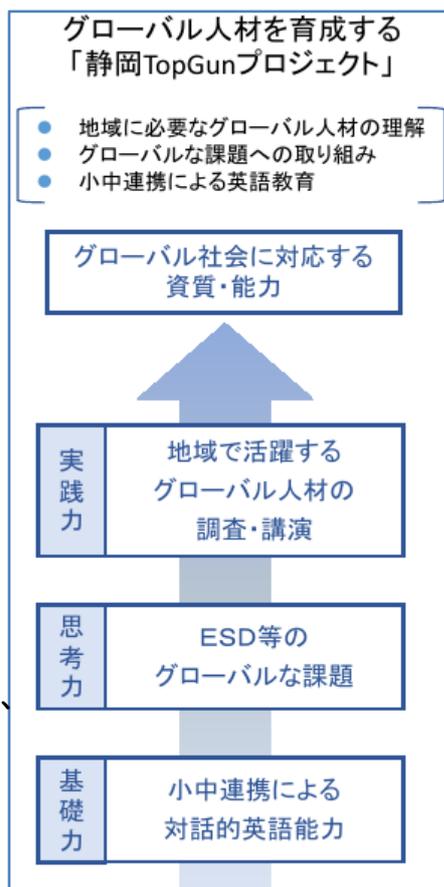
次期学習指導要領では資質・能力の育成を目的として、アクティブ・ラーニングなど新たな教育実践が求められるが、本校の実践はそのモデルとして公立学校でも活用できるものである。現在の研究は、前研究の成果を引き継ぎ、授業づくりの方法論の構築を目指しており、これが一定の成果を収めれば、公立学校での実践が容易になる。

・「グローバル教育」

浜松地区のいわゆる理系 TopGun 事業と対をなす、静岡地区の文系 TopGun 事業として、グローバル人材の育成に取り組んでいる。この事業に関しては、大学からの資金的・人材的な支援も受けている。

資質・能力モデルに従い、基礎力としての英語コミュニケーション、思考力としての ESD 等のグローバルな課題解決、実践力としてのキャリア形成の 3 階層で構想されたプログラムである。公立学校への展開を意識し、キャリア形成の階層では海外で活躍する人材ではなく、地域にある企業と海外とのつながりを調査することで、グローバル化が身近に起きていることを理解させつつ、自分の将来にとって英語が必要であることを再確認させる、という狙いを持たせている。

平成 27 年度は思考力の部分を実施しており、今後は基礎力と実践力の部分の開発にも取り組む。



・「附中キャンプ」

毎年夏休み前に、静岡県富士宮市にある本栖湖畔で、全校生徒、全教員による「附中キャンプ」を2泊3日（本年度は1泊2日）の日程で行っている。本校は各学年4学級だが、クラス毎の縦割り集団でキャンプサイトを運営する。企画から準備、当日のサイト設営、行事の運営に至るまで全てを生徒の手で行い、また、富士山を背に、大自然といかに共存するのかを念頭に、経験を重ねた上級生が下級生を導くことで、「自主独立」「真善美」の校訓の精神を具現化し、伝統として引き継いでいる。

・「附中夢講座」の開催

年に1度、PTAの協力を得ながら、生徒、保護者が共に参加し、様々な分野で活躍する講師を招いて行う「夢講座」を開催している。普段の学習では経験できないような実体験を通して、生徒たちの新たな目を開かせることに役立っている。17年目になった昨年度は、合計20種類の講座が開かれ、受講者は、前半10講座、後半10講座の中から、自分の興味のある分野2講座を選択

し、保護者や友人と共に楽しみながら受講することができた。講座の分野はバイオテクノロジー、コンピュータ、医療など堅いものから、ハンドマッサージ、お菓子作りなどまであり、受講者の幅広い興味に対応できるものである。本校のPTAは本校の出身者も多く、OBやその関係者などを通して、各方面で活躍している人材をフットワークよく人選することができるのも、伝統のある附属学校ならではのことである。今後は、静岡大学との連携も図りつつ、地域にも開かれた講座づくりなども計画していきたい。

#### ・「先進講話」の開催

外部講師を招き、先進的な教育の方向性を伺うことができる講演会を開催している。教育委員会、教育センターの指導主事や、公立学校の教員にも周知をし、地域と共に今後の教育の道筋を学ぶ機会とすべく取り組んでいる。

昨年度は、「高大接続改革から考える今後の教育について」をテーマに、株式会社ベネッセコーポレーション学校本部教育イノベーション推進課 課長、OECD 日本イノベーション教育ネットワーク 事務局長、東京大学公共政策大学院 客員研究員の小村俊平 氏をパネリストとして招き、静岡大学大学院准教授の益川弘如 氏、本校校長と共にパネルディスカッションを行った。地域の指導主事、教職員らと共に、小・中学校及び高等学校における今後の教育の方向性や子どもたちに育みたい資質・能力について考える機会とすることができた。

#### ・公立中学校との交流研修

本校では、10月に行われる研究協議会で、地域から多くの参会者を得て研究の成果を広げる機会としている他、本校のある静岡市の公立学校の教員研修の一貫である「近隣校研修」に参加したり、県内各地域から教員が赴任している特性を活かして、地元の研修会に参加したり、情報提供をしあったりして、地域との連携を深めている。

それ以外にかつては、本校の教員が公立中学校に一定期間（一単元を受けもつ期間）出向き、出前授業を行っていたと聞く。ところが、いつからかそれが断ち消えて、公立学校の教員と授業を論じ合う機会が少なくなっていた。

本年度は研修部を中心に、かつての出前授業を念頭にイメージしながら、公立学校との連携を深めるべく、本校職員が公立学校に出向き、共に研修をするという取り組みを始めている。昨年度中に市内の公立学校に連携を呼びかける通知を送付し、3校から合意を得ることができ、社会、数学科での交流を開始する。

今後は、連携する教科数、頻度を高めて行き、本校の研究成果を公立学校に広げていく手段として定着を図りたい。

#### 地域において、現在、貴校はどのような存在であると考えますか：

##### ・地域の人材供給源

本校出身者で、地域の企業経営者や行政、医療等各分野で活躍している人材が数多くいる。それは単に受験実績として進学校に多く進むということではなく、本校のもつ自由な校風の元で、校訓にある「自主独立」の精神や、独創的な発想力が培われていることが大きい。一代で地位を築いたり、起業したりする人材も多い。本校出身者は身をもってそのことを理解しているためか、子息を本校で学ばせたいと希望する方が少なくない。一般的には、所謂受験校としてのイメージが強いよ

うに思われているが、伝統的に、特別活動を重視し生徒の自主性を育てる教育が行われている学校で、結果としてそれが地域を支える人材育成に大きな貢献を果たしてきているし、今後もそれは揺るぎないものであると考える。

#### ・教員研修の拠点

本校の教職員は、校長以外は静岡市を中心に県中部、東部の市町の公立学校との交流人事で赴任している。3年から5年程度で本来の所属地へ戻ることになる。本校教員経験者が、教育委員会の人事担当に就いているケースも多く、この交流がやがて各地域の教育をリードする人材育成の大きな柱だと考え、地域の将来有望な若手教員を本校に送り出す努力を続けてくれている。実際に各地で多くの経験者が活躍をしている。本校は、その期待に応えるべく、教員育成を進めていく使命があると考える。

### 附属学校の存在意義、貴校の存在意義について：

#### ・教員養成（教育実習）

教育実習は、附属学校の大きな使命である。本校のある静岡県は、面積も広く、350万人の人口を抱え、学校数も多い。教員の半数近くが50歳代であり、数年の内にはその層が退職を迎え、教員の大量採用時代になりつつある。「小中一貫教育」が法でうたわれ、静岡市ではH29年から全校で小中一貫が開始される計画である。静岡大学教育学部は以前から小中両方の免許の取得を原則としており、ほとんどの学生が2年生から4年生までの間に毎年合計6週間の教育実習を行っている。また、新たに養護教諭の課程が設けられ、養護教諭実習も始まる。このような事情から、教育実習の人数は増加傾向にあるが、公立学校は少子化により小規模化し、また、多忙化により母校実習としての受け入れが困難な状況に陥っているのが本県の実態である。

本校では本年度、母校実習も含めると、3、4年生だけですでに75名の実習生を受け入れることになっている。教員一人あたりで平均4名の実習生を担当することになるが、公立ではとても考えられないこの受け入れができるのも、実習校としてのノウハウがあればこそのことである。日本の学校全体が優れた教員を数多く必要とする中、附属学校の教育実習校としての役割はますます大きくなると考える。

#### ・地域の研究・研修校

教育研究で地域の先導的な役割を果たすことが、本校のもうひとつの柱である。静岡大学教育学部の附属中学校3校は、それぞれの地域の実態の中で、先導的な特色ある研究を進めてきた。特に本校は唯一附属幼稚園、附属小学校からの連絡入学の生徒が在籍する学校として、異彩を放っている。本校の位置する静岡市が政令市に移行して10年以上になる。教育に関しては小中学校合わせて120校以上になり、広域人事の中、以前のようにお互いの顔がわかる教科研修が困難になるという難しさが生じている。そんな状況下、本校が地域の教科研修の拠り所として機能することの意義は大きい。教員の多忙化、新学習指導要領移行に伴う教育改革への対応、H29年の税源委譲を始めとする政令市のもつ課題等、公立学校教員は多くの課題を抱えている。

私たちが取り組んでいる研究成果を公立学校へ広げることで、これらの課題に活路を見出すことに貢献できると信じて、教育研究を推進していきたい。